

第 7 回「日中未来創発フォーラム」(北京) 参加報告レポート

国際基督教大学
教養学部 3 年
大谷航

1. はじめに

この度笹川平和財団様のご支援をいただき、北京で開催された第 7 回日中未来創発フォーラムに参加させていただきました。本レポートでは、参加前後での私自身の変化や、フォーラム全体を通じて私が感じたことを報告させていただきます。結論から申し上げますと、今回のフォーラムを通じて自身の日中友好や中国という国そのものに対する姿勢、眼差しを改めなければならないと感じました。大きく分けて 2 つの経験からそのように感じましたので、以下に述べさせていただきます。

2. 報告

「二度あることは三度ある」という言葉があります。今回の訪中とフォーラム参加は、私にとってまさにこの言葉通りでした。中国人民大学に通う友人と、三度目の再会を果たしたからです。彼とは 2023 年の冬に出会い、2024 年の春に再会し、そして今回一年ぶり三度目に再会しました。人民大の大教室で彼の声を聴いたとき、私は最初彼だとは気づきませんでした。彼の日本語が、一年前と比べてあまりにも流暢になっていたからです。

その後私たちは互いの一年間について様々な話をしましたが、その間ほとんど日本語で話していました。そして私は、彼の日本語能力に合わせてゆっくり話そう、基本的な単語を使おう、と考えていたのです。その日の終わり、これほどの失礼はなかったと反省しました。彼の日本語能力は配慮が必要なレベルではなかったからです。私は、自身が彼をどこかで見下していたこと、彼に対する配慮をはき違えていたことに気づきました。そもそも私が努力すべきは彼の文化に歩み寄ること、すなわちこの場面においては中国語を話すことでした。仮にも大学で普通話を学んでいる身として、彼の日本語能力に甘んじるどころか、自らも歩み寄りを見せようとしない私の姿勢は、恥ずべきものであったと帰国後も感じています。

私は今回のフォーラム参加以前にも 2 回の訪中経験がありましたが、それらの経験を振り返っても、中国の友人に対する私の態度には驕りがありました。彼らに対して私は「高みの見物」のような態度を取っていたと、今回の訪中で気づかされました。彼らの日本語や日本文化に対する関心に甘え、同じ土俵に立って交流するというごく基本的な姿勢を忘れていたのです。

このようなことを、北京市内の移動中にも感じていました。今回の訪中は空港・市内間の送迎や人民大キャンパス間のバスなど比較的多くの移動を含んでいましたが、私は努めて窓の外を見ていました。北京の街と、そこに暮らす人々の営みを捉えたかったからです。街路樹の下をジョギング

する人、運転席から忙しく電話をかける人、バス停で談笑する二人、北京市民はそれぞれの週末を送っていました。そのひとりひとりの表情がとても印象的でしたが、ここでも自身が彼らと同じ目線の高さにいないことを感じました。私は送迎の車内にいて、彼らは日常を送っている。その違いがとても大きく感じられたのです。中国は私にとって異国であり、中国を訪れるということは私にとって非日常です。しかし今までの私は、その事実を言い訳にして「どうせ違う、どうせわからない」というある種の諦めに近い感情をもっていたと思います。それが友人に対するコミュニケーションにも表出していたのでしょう。

財団の皆様には大変寛大なご配慮をいただき、非常に快適な旅行をさせていただきました。そのことには大変感謝しています。しかし、私は片言でいいから友人と中国語で話し、彼の興味を満たすだけでなく自分の好奇心にも貪欲に向き合い、さらに送迎の車を飛び出して北京の街を自分の足で歩くべきであったと感じました。

自身の対中理解に関する諦めに近い感情が、友人に対する不遜な態度につながり、自らの学びを妨げていたと、今回の訪中とフォーラム参加を通じて気づかされました。これは非常に大きい学びでした。これからは自身の態度を改め、もっと貪欲に、自身の好奇心に素直になり、しかし謙虚に、学び続けようと思います。

私は日中学生会議という、日中の大学生交流を促進する団体に所属しています。微力ながら運営に関わらせていただき交流事業の準備を進めていますが、その日々の雑事にかまけ、自身の好奇心や、中国という国を理解したいという初心を忘れていました。そのような人物が企画した事業が、本当に将来に資するような交流を生むことができるのでしょうか。

今後は私自身が楽しみ、自らの五体を駆使して貪欲に学んでまいります。そしてそれがいつかは日中学生会議というかたちで誰かの刺激となり、将来社会に還元されるよう、より一層努力してまいります。

3. おわりに

今回のフォーラム参加は、現地フィールドワークや中国人学生との議論など様々な活動を含んでいました。それらを企画していただいた関係者の皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。その詳細については、私よりもはるかに優秀な参加者の皆様がより良質な報告をされるでしょう。ですから私はあくまで、僭越ながら個人的な感想を述べさせていただきました。

5月の北京には柳の綿毛が舞っていました。外国人である私の眼にはとても風流に映りましたが、北京市民は疎ましく感じているといいます。いつか私も春の綿毛を疎ましく感じるくらい、中国に関する学びを続ける覚悟を綴って、私の報告とさせていただきます。